月刊

こころのとも

第七巻
一月号

力におごる

政治的
経済的
社会的

どんな力を
もっても
こころが
おごる

さとりとは

さとりとは
否定の中の
肯定なり

人生を考え直してみたい人は（二五）

―『聖書』解説（一）―

いつまで続くか分かりませんが、これから当分は聖書、とくに新約聖書の「山上の垂訓」と呼ばれる部分を解説して行きたいと思います。その部分にキリスト教の本質があると考えるからです。

ところで、私と聖書の出会いですが、最初のそれは、高校を卒業して間もない青年期の頃のものです。

当時、私は自分に生き甲斐が見いだせず、人生とは何なのか、随分悩んでいました。あたま（認知―言語）にも、からだ（感覚―運動）にも、こころ（情動―感情）にも、自分のどこにも自信が持てず、小説や宗教書を手当たり次第に読んでいました。

その中の一つが、どこかのキリスト教団体から貰った新約聖書だったのです。赤い表紙の小型本でした。常に携帯し、読みました。でも、それは私を勇気付けるのには何にも役立ちませんでした。

なぜかと申しますと、たとえば、いつか解説することになりますが、「・・・悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。・・・下着をとろうとする者には、上着もやりなさい。」という部分を読んで、そんなことは私にはとてもできないと思ったからです。その他、多くの部分が私にはとてもできないことばかりでした。よく分からないので、どんなことなのか解説書を読んでみても、こころの底から納得できるものはありませんでした。

ですから、勇気づけるというより、ますます自分をだめな人間と思わせたように思えます。

第二の出会いは、今から六年程前のことです。何がきっかけだったか忘れましたが、山上の垂訓の部分を読んでみたのです。

驚きました。この人は解脱していると感じたのです。解脱していなければこんなことは言えないと思ったのです。若いとき理解できないことが、例としてあげた部分は勿論のこと、すべて真理であると分かったのです。

そしてその後、折に触れキリスト教関係の本を読んできました。いろいろなことを勉強できました。

私は、これまで何度となく述べてきました通り、人間は生まれながらに、こころの底、あるいは、はらの底に如来さまを宿していると思っているのですが、キリスト教では、人間は「原罪」を背負って生まれてくるとされ

ています。私は、山上の垂訓を説いたイエス・キリストが原罪のようなことを言うはずがないと思っていたのですが、それがその通りだと分かりました。イエスが復活したとか、人間は原罪を背負っていて、その償いのためにイエス・キリストが十字架上に磔（はりつけ）になったとか言われるようになったのは、イエス・キリストの弟子たち、特にその中でもパウロに大きな責任があることが分かりました。

科学の発達していなかった中世までならいざ知らず、現代人にとって人間が磔（はりつけ）の刑にされた後、墓地から死体がなくなり、生き返るというようなことは到底信じられないことです。もし生き返ったとすれば、それは死んでいなかったからだとしか思えません。

この考え方も現実に中世までは通用し、キリスト教を広めるのに一役買ったかもしれませんが、現代では、かえってキリスト教の発展の邪魔になっているように、私には思われます。宗教には科学で論理実証的に証明できないことはあってもよいのですが、科学的常識に反することは、たとえ宗教といえども、無いほうがよいように思うのです。

また、原罪という考え方も、人間を否定的に捉えていて現代人には取り入れ難いように思われます。仏教にも業という考え方がありますが、それは生まれた後の経験のあり方、その蓄積によって決まるもののように、私は考えています。

勿論、私のような考え方とは違って、仏教の中にもだんだんと、「前世の善悪の所業によって現世に受ける報い」という考え方も出てきましたが、私は、人間は生まれながらに自分の中に如来さまを宿していて、生まれたての人間はみんな仏さまだ、と思っているのです。ただ、生まれる時代、生まれる土地、生まれる家、などによってその人が生まれた後に自分では選択できない環境を与えられて、それが業として蓄積されてはいきますが、しかし、それは生まれながらではありません。

このように、聖書との二度目の出会い以来これまでの勉強で、キリスト教が今日まで誤って伝えられて来たことを知ることができました。

このシリーズの聖書解説では、私が理解したイエス・キリストを伝えていきたいと思っています。

ご存じの方も多いと思いますが、キリスト教はユダヤ教から生まれました。しかし、その母体となったユダヤ教をキリスト教の立場からは「律法主義（戒律主義）」に陥っているものとして排します。でも、私からみますと、イエス・キリスト死後のキリスト教も一種の律法主

義に陥っているように思えるのです。

つまり、イエス・キリストの解脱した精神ではなくして、後の弟子たちや信者たちによって書かれた聖書の字句にあまりにも執らわれ、それを教条として信奉し過ぎているように思えるのです。

詳しくは、今後、何度も触れることになると思いますが、例えば、イエス・キリストは「神の国」を実現するのは、先ず自分のこころの中であると言っていると思うのです。それが、どうも後のキリスト教では、それがなくても外的なお互いの行為によって実現できると言っているように思えます。それを支えるものが愛だということだと思うのですが、実は、その愛を個々の人が実践できるには、キリストのいう「神の国」を各自が、先ずこころの中に実現しなければならない、と私は思うのです。

そのことを後のキリスト教では忘れているように思えるのです。

人間は、何度も述べますように、難儀なことには「あたま」でいくら分かっても、実際にその通りに自己をコントロールすることはできないのです。もっとも優秀な弟子（信者）とされていますパウロでさえも、「精神には神が宿っていても、肉体には悪魔が宿っている」ということになってしまうのです。

ですから、イエス・キリストの言う愛を実践するためには、自分をコントロールできなければならないのです。それが真にできるのは、こころの中に神の国を実現した時だけなのです。

ここで、退屈な話になりますが、聖書について少しだけ解説しておきます。

ご存じのように、聖書には、旧約聖書と新約聖書とがあります。旧約聖書はユダヤ教から引き継いだもので、あの有名な創世記やモーゼの十戒に基づく律法（戒律）も含まれています。

また、新約聖書は、イエス・キリストの言行録であるマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの「福音書」をはじめ、使徒などの宣教活動を伝える「使徒行伝」や、先にも記しました使徒パウロが書いた様々な「手紙」などが含まれています。

私が、このシリーズで取り上げますのは、主としてマタイの福音書の山上の垂訓と呼ばれます五章、六章、七章です。マタイ伝だけがこの三章に、キリストが説いたとされることをまとめているからです。他には、マルコ伝のいろいろな箇所に、このマタイ伝の記述に対応すると思われるところがあります。必要な場合はそれも参照したいと思っています。

自作詩短歌等選

老人のリハビリ

老人のリハビリで
大切なこと

①意欲を引き出すこと
②ほめること
③したことを認めること
④叱らないこと

前の三つは
子育てでも
言えること

仕事は何のため

金儲けのため
名誉のために
仕事をしたら
そして
日常に流されて
仕事をしたら
結局は
空しいだけ

争いと弱者

強大な
戦力誇る
人類が
エゴを求めて
争えば
滅亡そこに
待ち受けている

争えば
必ず負ける
弱者こそ
われらに対し
争いの
空しきことと
和すことの
満ちたることを
共に示せり

ことばにこころ無し

クラス会
担任教師
たずねても
いじめはないと
生徒たち
だけどその後
自殺者が
そのクラスから
出たという
教師のことば
心無く
生徒の心に
届かざりけり

思想をもたない学者

障害児を知らず
思想をもたない学者の
障害児教育議論など
太った豚の
哲学談義の
ようなもの

未来を
切り拓く思想を
もたない
教育学者は
単なる
文献整理をする
事務職に過ぎない
そこに
学問的
創造の世界は
何もない

千差万別

自己は
千差万別

でも
他己は
共通で
互いに理解可能

平和の平の字

平和の平の字には
バランスをとるという
意味がある

自他のバランスが平
自他の統合が和

方便への執らわれ

方便に
執らわれ人は
悪をなす

方便も
執らわれあれば
悪となり

解脱とは

解脱とは
人生の
真の意味と
真の価値が
分かるということ

自作随筆選

漱石の示唆

正月二日、テレビで夏目漱石原作の映画「我輩は猫である」を観ました。監督は市川崑、主演は仲代達矢で、主人公の苦沙弥先生を演じていました。そして、いつも知ったらしく理屈を並べる迷亭先生は、伊丹十三が演じていました。二人とも好演でした。

この映画には、筋らしい筋はないのですが、全編がギャグや社会風刺の連続で、私はめったに映画は観ませんし、たまに観ても最後まで観ることは殆どないのですが、

これは退屈せずに観ることができました。

その中で、とても印象に残った言葉が、二箇所出てきたのです。どちらも迷亭先生の口から出たもので、正確な言葉は忘れたのですが、一つは「猫はうらやましいなあ。誰ともこころを通じなくてもよいのだから。」というもので、もう一つは「個性が尊重されだすと、家庭は崩壊するようになる」というものでした。

「我輩は猫である」は、明治三十八年から三十九年にかけて書かれたものですので、もう九十年も前のことになりますが、でも、この二つの言葉は完全に現在のこととして通用していると思うのです。

なぜそうなのか、つまり、どうして私の注意を引くことになったのか、少し説明しておきたいと思います。

まず、はじめの「猫はうらやましいなあ。誰ともこころを通じなくてもよいのだから。」についてです。

明治維新以来の欧米の個人主義思想の輸入は、日本人に対してもだんだんに「他己」を弱めさせ、「自己」を肥大させていったものと思われます。漱石はそうした風潮を敏感に感じ取っていて、それが、この言葉となって出てきたのだと思うのです。

私が、何度も言ってきましたように、他己を弱め、自己を肥大させるほど、人間は外界に定位できなくなってくるのです。

しかし、人間は外界に定位しないで、精神的健康を保って生きていくことはできません。人間らしく生きるためには、どうしても外界に定位しなければならないのです。他己が弱体化していますと、この定位がとても負担に感じられるのです。誰かとこころを通わせることが、大きな負担になってくるのです。それが、この言葉になって表れていると思うのです。

次に、「個性が尊重されだすと、家庭は崩壊するようになる」ですが、まさしく現在の日本が、そうなっています。

これまで家庭が持っていた働きは、古い封建社会ですと、生産と消費の単位であるばかりではなく、教育もお互いの精神的健康の維持も、すべてがそこに含まれていました。ところが、明治になって徐々に産業資本が勃興しはじめますと、生産が家庭から独立して来ました。それと同時に、教育も国家が義務教育として学校でまとめて行うようになってきたのです。しかし、まだ働き手は主人一人で、主婦は家庭を守っていました。ところが、最近になり個性の追求として、女性も働き手となって、家庭から外に出、自己の生き甲斐を求めるようになりました。

こうなりますと、家庭の働き・機能は、もはや生産の単位でないばかりか、消費の単位でもなくなってしまいました。消費の単位が「家計」と言われるには、一家に一つの財布が原則であると思うのですが、今はそうではなく、おとなは一人一人が財布をもつという「個計」に変わってきつつあるのです。

また、主婦が家庭を守っているときは、子どもの教育、特にしつけを中心とした人間教育は家庭で行われていましたが、今は、それも家庭から外にまかされるようになっています。自分たち親が子どもの人間教育を行う責任があるという気概も失われ、自分は子どもをペットのように可愛がればいいと、しつけを放棄しているのです。そして、例えば、質実剛健にするためには、どこかの道場で剣道や柔道や空手などを習わせ、また、情操を養うためには、さまざまな音楽塾へ行かせたり、お花やお茶などを習わせたりしているのです。

それとともに、親が家庭にいないわけですから、必然的に親の手作りの料理は少なくなり、食事も外食が多くなっていますし、たとえ家庭内でとっても個々ばらばらにとる機会が多くなっています。

このように、子どもは、さまざまな場所で、さまざまな教育を、いろいろな人から、職務として、切り売り的にばらばらに受けているのです。つまり、自分に人間として「精神」の全てで関わってくれる人はいなくなっています。それは、ある意味で子どもに対して、みんなよそよそしくなっていると言えるのです。ですから、子どもは自分の「精神」を一つのものとして統合できなくなってきています。おとなを信じられなくなっています。それと同時に、自己の「個」としての、主として、「欲望の追求」だけが、確かで、手ごたえのある生きる目標になってきているのです。

こうした状況は、現在の家庭崩壊、シングル指向現象（結婚回避、離婚、核分裂家族化）となって現れていますが、漱石はこうした状況を明治に既に予想していたと思うのです。

では、生産、消費、教育の機能を失って来ている家庭に、果して残された役割はあるのでしょうか。最後にこの点を検討しておきたいと思います。

私は、それを家族構成員相互の「人格完成の場」に求める以外にないように思っているのです。

そのためには、父親も母親も、共に、もっと働く時間を犠牲にすべきだと思うのです。それを国家や企業は認め、与えていかなければならないと思うのです。そうしないと社会全体が崩壊してしまうように、私には思える

のです。

では、人格完成の場とするとはどんなことでしょうか。それは具体的には、子どもをペットとして可愛がるだけではなくて、「自分をコントロール」して子どものために「自分を捧げる」ことなのです。それは、勿論、子どもを自己の野望達成の手段とすることではありません。

そうではなく、子どもを一人の人格として尊重し、①子どもにどこまでも「愛情」を与えます。その愛情の基礎の上に、②子どもに「自由」を与えます。好きなことをさせて、成就・達成感を味わうことができるようにさせるのです。さらに、それら愛情と自由の上に、③子どもが耐えてしなければならない「統制」を加え、しつけをしていくことが大切だ、と言えるのです。

自由を与えることで「自己」が育ち、統制を加えることで「他己」が育ちます。愛情は自己と他己の統合をもたらすのです。

ここで一番難しいのは、①の愛情をもつことです。これは、意識してできることではありません。いま、日本人が個人化することで、みんな自分は愛情をあげないのに、もらいたがっています。それは子どもに対しても同様なのです。実は、それは愛情をもらうことが、外界へ自己を定位することになるからです。

私が言いますように、家庭が相互の人格完成の場になるためには、子どもの成長だけではだめなのです。おとなの側の成長もなければなりません。その成長とは、現代人にとっては、即、他己を育てることであり、また、人間の普遍的なものとして、自己と他己の統合をはかることなのです。

しかし、他己の弱体化している現代人にとって、他己を育てることは並大抵ではありません。その最大の契機が、私は、この子育てにあると思っているのです。

自分を追求することを犠牲にし、自己を捨てて子育てをする。それによって、他者とこころを通わせることの大切さを体験するのです。それは、自分の愛情を育てるだけではなく、子どもの愛情を育てることでもあるのです。お互いが愛情を育て合うことが、大切なのです。それを私はお互いの人格完成という意味で、「響育」ということばで表現しています。こころを響かせ合って、お互いが人格を完成させていく。そこに家庭の役割というか働きというか、そうしたものがあると思うのです。

何もこれは、子育てについてだけ言えることではありません。夫婦関係についても同様なのです。

漱石原作の「我輩は猫である」の映画をみてこんなことを考えました。

釈尊のことば（四二）

―法句経解説―

（一五五）若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、魚のいなくなった池にいる白鷺のように、痩せて滅びてしまう。

（一五六）若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらないならば、壊れた弓のようによこたわる。――昔のことばかり思い出してかこちながら。

若い時に、財産を獲得しなかったり、清らかな行いをしなかったりしたら、年老いた時、よくないことが待ち受けている、と言っています。

この偈を読みますと、釈尊時代のインドでは、若いときは働いて財産を作らなければならないと考えられていたと思われます。

でも、釈尊はいわゆる労働をされませんでしたが、そのことを人からとがめられた時、自分は人のこころを耕しているといっておられます。ですから、修行するものは、財を蓄積するために働く必要はなかったと思われます。

でも、このことが、中国で仏教が広がるとき障害になりました。中国では、理由のいかんを問わず、労働をしないことは悪だとされていたからです。

そのため、中国で栄えた禅宗では「作務（さむ）」といって、修行として労働することが求められています。

百丈懐海禅師（七四九―八一四）は、「一日作さざれば、一日食らわず」と言っています。実際に、禅師は、弟子が師匠の身体を気づかって、百姓の道具を隠したところ、食事をしなくなってしまったそうです。それを見て、弟子はあわてて道具を元に戻したと言われています。

私も、ヨーガをする時は、それぐらいの心構えが欲しいと思っています。ヨーガをしない日は食事をしない、といった固い決意がなければ、毎日続けることはとても難しいものです。ヨーガは人間性を磨くのにとてもすばらしいものですが、でも毎日続けなければ、たいした効果はありません。それも、毎日十分でも二十分でも結構ですから、五年も十年も続けなければ、本当の効果は分からないのです。

そして、これぐらいしたから、これぐらいの効果があるはずだ、などとはかってはなりません。ただひたすら毎日、師匠と思える人の言うことを守って、行うだけなのです。一生にわたって、ただ行うだけなのです。

第一二章　自己

（一五七）もしもひとが自己を愛しいものと知るならば、自己をよく守れ。賢い人は、夜の三つの区分のうちの一つだけでも、つつしんで目ざめておれ。

この偈で、誰もが分かりにくいのは「賢い人は、夜の三つ区分のうちの一つだけでも、つつしんで目ざめておれ。」という部分です。まず、ここから検討します。

この解説のテキストにしています中村元著「真理のことば感興のことば」（岩波文庫）の解説には次のように載っています。

「古代インドでは夜に三つの時分があると考えていた。それと同時に人生にも三つの時期がある。第一の時期では遊戯に夢中になっている。第二の中間の時期には妻子を養っている。第三の最後の時期だけは少なくとも善をなすべきであるというのである。この三つはほぼ少年期、壮年期、老年期に相当するといえようか。ブッダゴーサによると、人生の三つの時期のうち少なくとも一つの時期はめざめて修行につとめよ、という。在俗信者が第一の時期に善をなすことができなくても、第二の時期に行なうべきである。第二の時期に妻子を養っているために善をなすことができなければ最後の時期に行なうべきである。第一の時期に出家したがなまけた場合には、第二の時期に沙門の法を行なうべきである。第二の時期に怠ったときには最後の時期に沙門の法を実行すべきであるという。」

この解説を読みますと、この偈の解説はもういらないように思われます。でも、残りの部分、つまり前半の部分を少しだけ、解説しておきます。

それは、「自己を愛しいものと知るならば、自己をよく守れ。」というものです。

人間は誰でもが、自己が愛しいものです。自分が一番可愛いものです。だからこそ、自分の情動（欲望、情緒、気分）の満足だけではなく、もっと高いところにある、自己の生きる意味を見つけなければならないのです。

それには、偈にありますように、自己を守らなければなりません。つまり、自己を知ることを目指して、より善く生きようと、精進しなければならないのです。

私は、五十歳で人生の一大転換期が訪れました。真言密教の修行をすることで、これが弘法大師の言われる即身成仏だと自覚できました。その時から私は、最早、自己を生きる必要がなくなったのです。人間は五十歳を過ぎたら、みんな他者のために生きたいものです。

後記

一、明けましておめでとうございます。早々に年賀状を頂きました方に、誌面を借りてお礼を申し上げます。私は、どなた様にも年賀状を失礼させて頂いています。お許し下さい。

二、今年は格段に寒いようです。四国も雪が十二月のうちから、時折ちらほらと舞っています。新聞によりますと、どこのスキー場も多くの積雪があり、スキー可となっています。私も、今から十年前なら嬉しくなってくるところです。でも今は、自分のためなら、スキーに行きたいとは全く思っていません。そんな暇はありません。

三、古本屋へ行くこと、その時に、うどんか回る寿司を食べること、それ以外に、お金や時間をむだに使うようなこと、つまり「余技」や「気晴らし」は何もしていません。釣りも、囲碁・将棋・マージャン・パチンコなどのゲームも一切しません。映画を観ることもテレビでドラマを観ることもありません。何かをしながら、ニュースなど横目でちらちらと観る程度です。新聞も殆ど読みません。文学も勿論読みません。読むのは、殆ど、宗教、哲学、教育、心理学関係の本に限られています。

四、かつて坊主になる前、ボルボというスエーデンの車に六年程乗りましたが、今は、スズキの軽四に乗っています。中古で買ったもので、登録初年度から十年にもなり、十一万キロ以上走っています。でも、調子良く走ってくれます。車庫に入れませんし、洗車も滅多にしませんので、塗料もはげはじめていますが、でも、まだまだ当分は乗れそうです。

五、服装も、大学へ行くとき以外は、普段は作務衣以外は着たことがありません。それもつぎがあたっています。

六、私は、日々、質素倹約、専心勤労、他心感応、聖道修証、を実行するよう心掛けています。

七、今、宗教家が、孔子と同じように、自分は出来もしないことを人に説いています。世も末、末法の時代です。

月刊　こころのとも　第七巻　一月号（通巻七十三号）

平成八年一月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０